



Title	<翻訳>『ペンサムの伝説 その3』
Author(s)	ダイ, ママーニング; 松木園, 久子
Citation	印度民俗研究. 2025, 23, p. 33-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ペンサムの伝説 その3』

ママーニング・ダイ 著

松木園 久子 訳・註

吟遊詩人の歌

彼らの行くベルベットの道には
夏の赤い鳥たちが地上を旋回する

旅路を行く

私は、望みを叶えるストゥーパまで行けなかった。ジュールズは町に戻ろうと急いでいたのだが、今やモナと合流しているのだし、モナにしても同じである。そのうえ、私たちの方の村にはジュールズが興味を持ちそうなものがたくさんあった。彼はホクソとラークトに訪れるべき場所を尋ねていた。

ラークトは言った。「友だちを連れて行ってやらないといけない場所があるだろ。白人たちが行った村だ」その村には昔の親戚がいるから一緒に行ってやろう、と彼は付け加えた。

白人たちが行った村。言い得て妙、というものだ。

20世紀初頭は大変な激動期で、人里離れた私たちの山々ですら世界に開かれたのだった。1911年とあるイギリス人官僚が、アーディ族の領土を通って流れるシアーング川の経路を探索する任務を帯び、アッサム平原を出発した。丘陵地帯の部族に20年もの間対処した経験があるので、ノエル・ウィリアムソンはその地域で有名だった。しかし今度ばかりは、彼の旅は悲劇に終わった。コムシング村で、怒ったアーディ族の男が彼を打ち取ったのだ。同じ部族のほかの男たちが加勢し、そして大虐殺が起きてしまったのだ。

襲撃を引き起こしたのは何だったのか、誰にもはっきりと分からなかつた。記録された証拠のなかには、意思疎通の行き違い、つまり村々を滅ぼすためにウィリアムソンが軍隊を連れてくるものだと部族が恐れることを示唆するものもある。その白人の旦那がある男を侮辱し、後にその男がコムシングまで付けていって殺した、という見解もある。はたまた、この襲撃の数年前のスキャンダルに触れて、説明されることもあった。それは、

川の流れにしたがって繰り広げられた、地元の女と別の白人の男との間の誘惑とロマンスの物語だった。男の存在は女を鷹のように不敵で怖いもの知らずに変え、部族は報復として厳罰を下した。おそらく、原因となったのはこの出来事の記憶だったのだろう。すべては憶測だが。

確実なのは、ウィリアムソンと彼の友人で茶園の医師だったドクター・グレガーソンのほかに、47 人の兵士と苦力も殺されたということだ。生き残って語り伝えることができたのは、わずか三人だった。

大虐殺のニュースは植民地インドを震撼させ、1912 年の討伐に至った。アボール遠征軍として知られるようになるものだ。それは恐るべき隊列で、犯人を捕まえ、アンダマーン諸島の牢獄へ送るべく、混沌とした原生林を叩き切りながら進んでいった。ウィリアムソンの石碑はコムシングで除幕され、村の長屋を見下ろす場所に今日も立っている。村人たちはイギリス人に教えられた通りに、今なおその石を世話している。

コムシングまではきつい登り道だとラークトは言った。そして、その村の長は年を取った陰気な男で、いまだに道路が通っていないのはあの大虐殺のせいかもしれないと信じているのだと。

旅立ちの日、私たちの目の前で、最初の雨が土砂降りになって景色を一変させた。私たちは夜明けとともに出発し、霧と影と水のなかを車を走らせた。豪雨の恐ろしい雨音をブリキの屋根に受けながら、ピゴの町を通り過ぎた。大小の川を渡った。泥の山々を越え、紫色のぬかるみを横切ると、車は恐ろしいほど滑った。長い橋までたどり着くと、ラークトは私たちに降りるように合図した。そこからは歩くしかない。密接した木々の林冠を見渡していると、村へ続く道がどこにあるのだろうと私たちは思った。

ジュールズはカメラをビニールに包んで運び、ラークトは私たちのバッグを運んでくれた。彼は私の靴を見ると、両手をこすり合わせて笑った。山に最適な履物といえないのはたしかだが、でも何とかなるわと私は言った。橋は激しく揺れ、ひっくり返して川へ振り落としてやろうとばかりに怖がらせるので、私はトウの固い結び目をしっかりと握った。もう片方の手で、ラークトがモナと私のために傘の形してくれた、緑色のオオバコの

葉を差していた。これは川にかけられた最長の人道橋で、この場所で長く下を向き過ぎると、力強いシアーグ川の静けさのあまり、川のなかに引きずり込まれそうに感じることもある。

ラークトが先導し、私たちは雨でびしょぬれになった服のまま、霞のなかで息を切らし、顔からは湯気が立ち、筋肉を震わせながら橋を渡ると、長い山道を登り始めた。村の門まで半ば登ったところで、きびきびと学校から帰って来る子どもの集団に出会った。明るい色の傘を持ち、学校の本を脇に抱え、興味津々で私たちを見ていた。「よう！」ラークトが叫んだ。

「先生は誰だい？」子どもたちは名前を言った。「ああ、知ってるとも。まだやってんだな、あの意地悪いさんめ！」子どもたちは笑って、私たちが通れるように木々を背後にして片側に身を寄せた。

私たちは村へ到着すると、熱気に包まれた。私たちが一休みできるように、村の長屋モソウプが用意されていた。大きな火が焚かれていたのは、私たちが滞在するのを見越したのと、物語の長い夕べに備えてだった。そんな夕べには、プースングの踊り子たちの歌のなかで神話と記憶が生き返るのだ。



彼らは幾晩も眠っていなかった。もし一瞬目を閉じたなら、もし彼らの靈魂がさまよったなら、もしステップを踏みまちがえたならば、いよいよこれからというときに旅は終わり、彼らは悲しみに打ちのめされる現在へと帰り、その悲しみに付きまとわれてやがては早死にすることになるだろう。彼らを率いている男は女物のガレをまとい、彼が詠唱するリズムとともに揺れるドゥムリングという手の込んだ髪飾りを着けている。彼がミーリ、すなわちシャーマンであり吟遊詩人なのだ。

今夜、踊り子たちは歴史の語りにおける山場、すなわち「旅路を行く」場面まで来ていた。

ある男、森を走り抜ける

彼は細い山道をたどっていた、何も履かず何も着ずに走りながら。時折左右によろけたが、目的地まで早く行ける、隠れた小道からそれることはなかった。下生えを突きっ切り、急いで山を下りた。今度は平らな土地を駆け、また登っていくと、彼の息は馬のように、鼻腔から笛に似た音が鳴っていた。聞こえるのはそれだけで、彼の息は体内で、熱風が一気に毛穴と血管全てを満たして破裂させ、そして血と深い暗闇の爆発で彼を吹き飛ばすかのようだった。

彼は夜半過ぎに村に着いた。長屋は、それぞれの氏族が赤々と燃やす炉で輝いていた。息を切らして彼が戸口に立っていると、親族が彼の方へ振り向いた。

「奴ら、川を渡ったぞ」

ここで物語を踊っている女たちは揃って手を動かし、軽く手を打った。

「奴らは今どこだ？」

「尾根のそばでキャンプを張ってるぞ」

すでに川を渡り終えたほかの男たちは、役人と軍人だった。巨大な山に視界を塞がれていたが、何としても先へ進まなければならなかった。銃を装備し、ポーターの列を連れていた。ポーターは食料と武器を運び、隊が密林を叩き切りながらより深く進むのを手助けしていた。

そうっと、そうっと、この恐ろしい旅路を行かねばならない。

「奴らは今どこだ？」

「エイング・アーレクまで来ている」

隊は、山のふもとを取り囲む大きな竹林に到着し、その山の上に村はあった。

白人の男がひとり殺された。贈り物を抱えて村に来たことのある旦那だ。そして今度は兵隊がもの悲しい、怯えた山々を踏みならし、全宇宙中の力を総動員して殺人犯を見つけ出そうとしていた。それは、あの役人のお供をしていた、卑怯者たちのせいだと誰もが知っていた。彼らは面と向かつて貧しい村人を笑い、病にとりつかれたお前のような野獸を白人のお役人たちは気にも留めないし、情けをかけてくれるわけがないと言った。情けをかけてもらいたいなどと思っていない人間をどうして侮辱などできるも

のか。一方は土地の人間であり、もう一方は嘘と贈り物を何袋も使って村を征服している訪問者だというのに、その村人を嫌悪の目で見ることなどありえようか。人の顔に唾を吐くような人間がどうして生きながらえようか。銃と大声を恐れる人間ばかりではないということを白人たちが学ぶのは時間の問題にすぎなかった。

一晩中、長屋の男たちは寝ずに待ち構えていた。

一晩中、下方のキャンプでは役人たちが策を練り、隊に指示を与えていた。

(ある役人がノートにこう書き記していた。「森は動物みたいなものだ。我々をぐるり取り囲んで息をして、いつ緑色のヘビのように朽ちかけた植生から突然飛び上がるか、または血と毒を出す蝙蝠のマントのように我々に襲いかかってくるか、知る由もない。木々は巨大で邪悪だ。我々を取り囲んで立ち、我々を見下し、待ち構えているのを感じる。動くのが怖い。山積みの腐った葉やシダの茂みは忌まわしい罠であり、昨日そこからとび出した杭で雇っている地元の男が三人もけがをした。足がパックリと切れ、彼らは死んでしまうと叫んでいる。というのも、これらの火で鍛えた竹のパンジーは、刀のように研いであり、先端を毒に浸してあるからだ。これは恐ろしい戦争だ。こんなに恐ろしく、つらいことを記録するために来なければよかったですと思っている」)

長い叫び声が崖にこだましたのは、まだ夜明け前のことだった。雷のような音が兵士たちの頭上でとどろき、村から飛んできた石や岩の雨が竹藪をなぎ倒した。竹が爆ぜて白い粉塵を上げると、割れた幹がノコギリ刃のついた破片となって、ナイフさながら人の腹をえぐるのだった。兵士たちは岩だらけの道をよじ登りだした。足下で石が滑り、彼らは必死に蔓の根元を握りしめた。

その道は急で危険だったが、雄鶏が混乱した眼をまだ見えない太陽に向かってときには、意を決した男たちはすでに村への道を半ばまで登っていた。

太陽はかつて人間に呪いをかけた。「毎朝、私が昇るとき、世界でだれかが死ぬことになるだろう」

ここで踊り子たちは体を揺らし、うめき声をあげる。

兵士たちが村へ進軍したとき、待っていた男たちは立ち上がり、彼らを出迎えに前に出た。身を切るような寒さだった。村の男たちは白い手織りの布にくるまり、黙って、悲しみに暮れる亡靈のように霧のなかから現れた。

彼らは互いの顔に疲労の色が深く刻まれているのを見た。どこからやって来たのかと、互いのことを考えていた。

(山での襲撃の前に、ある若い兵士はクリスマスが間近だということを思い出していた。海の向こうでは、彼の生まれた街に音楽が軽やかに鳴るのを聞いたし、店の上にアーチ状にかかった明かりを見つめていた。店から出てくる人々は子どもの夢を叶えるため家路を急いでいた。彼の街には雪が降っていた。ここでは、氷が鋼のようにきらめき、山の端から村を照らし出していた。ここからは、彼らのボートが出発した川の向こうにある町ですら、はるか遠くに離れている。密林は何もかも覆い隠し、蔓を燃ったロープと巨木は人目を盗んで抱き合うかのように、絡まっていた。道を空けるためにダイナマイトが必要な時もある。一体何という世界だ、そしてなぜ彼はここにいるのか?)

一人の役人が命令を発した。彼の背後で、銃が空に向かって火を吹いた。踊り子たちはじっと息を殺している。石の城壁では、巨石の雪崩を降り注ぐ用意ができている。

降伏は一種の和平だ。村の男たちは目を閉じて、和平の象徴を思い起こしていた。折れた矢と曲げられた剣。そして弓の弦を切り、槍を地面に投げ捨てた男たちの後悔。

日光が消えると、村長は村人たちを呼び、彼らは長の前に集まって立った。悲しい指示を出さなくてはならなかった。今日からは毎日、殺された白人の旦那を記念する石塚が高く積みあげるまで、彼らは列になって順番に石を手渡していくことになる。兵士たちが銃で示し、村人は毎日集まって、事件が起きた、長屋の上にある斜面の正確な場所に印をつけるのだった。文字の彫られた石版が石の上に重ねられ、見知らぬ者がささげ銃をして死者を称えたとき、村人たちは初めてラッパの号令というものを聞いた。

殺戮はここで起きたが、殺人者は別の村の者たちだった。しかし、私た

ちの部族ではある。たしかに、あの白人はいい人だったのだろう、おそらく村で歓迎されたんだろう。しかし、彼がこの山々へやってくるずっと前に運命は記されていたのだ。最初の一撃を繰り出した男の運命とちょうど同じように。男は捕らえられ、鎖をつけられて黒い海を渡った島の牢獄へと連れて行かれた。

二人の男。魂を入れ替えたように、片や陰気な山々に、片や安らぎのない海に囲まれたのだった。

夜も明けようとしている。踊り子たちはいまだ、注目を乞う最後の祈りの言葉に合わせて体を揺らしている。

川のそばの家では、男と女が夜明けのそよ風で目を覚ました。彼らは毎日寝床を共にし、古い壁のなかで暮らした。大事件のなりゆきが盾となつて、彼らの奇妙な愛情を育んだ。もはや時間は尽きようとしていた。彼らのつないだ手から滑り出し、押しつけあった唇から漏れる息と瞳から発する光を連れて逃げ去ろうとしていた。

男は手つかずの自然の地図をつくり、川の源をたどるためにやってきたのだった。調査の任務を負った駐在官でありながら、彼が発見したすべてのこととは、川がひとりの女だったということと、もはや自分の魂は川の真ん中の翡翠色の部分に永遠に溺れてしまった、ということだった。

この出会いがどんな結果を招くだろうか。それに代えられるものがあつただろうか。線なら紙の上に写すことができるだろう。新しい絵も現れるだろう。文字だって書かれるだろう。物語は歌のなかで、または光り輝くインクで命を吹き込まれるだろう。しかしもう一方の言葉、夜明けに交わされる、優しく激しい、秘められた囁きを知る者はないだろう。

不義の代償は、竹の杭で心臓を貫かれるだった。しかし恋人たちはすでに全てを経験していた。ひとつになることの喜悦、別離の痛み、そして死ぬときの記憶のように、感覚が忘れがたく絡まりあうのを。

踊り子たちはため息をつき、目を拭う。炎は赤々と燃え、シャーマンは実物よりも大きく伸び上がる人影だ。彼はこの世の初めを歌った。村々の大きなかがり火を点した、五つの金属でのできた剣を歌った。彼は自分の

兄弟、ひとりの男を殺して殉死者となった者の物語を歌い、村に刃向かって川のそばの家に住んだ鷹のような女の物語を歌ってきた。それが彼が守り抜かねばならないもの、物語、時と運命の叙事詩なのだ。

最後に私たちとともにあるのは、思い出だけだ。剣が音を立て、踊り子たちが声を合わせて歌う。彼らははるばる旅してきたのだ、聖なる歌が通った道をたどって、いにしえの谷を越える信者の列のように。止むことがないのは言葉であり、彼らが歌う理由は、山々が古く、あらゆる罪とわびしさ、人が血に魅せられることよりもさらに古いからだ。今や旅はほとんど終わっている。彼らは音もなく飛ぶ鳥たちのように帰ろうとしている。シャーマンが叫び声をあげる。髪につけたビーズがきらめく。ヘビのビーズ、キツツキのビーズ、最初の男と女のビーズ。この世の初めから、ひとつまたひとつと、こしらえられてきたビーズだ！

後ほど年老いた村長が私たちに言った。「わしらの村は恐怖の村だと思われているが、本当じゃない！オレンジの木の葉はきらめいておる。山々も日の光を浴びて輝いておる。兵隊が行進していたのと同じ石段を、子どもたちが笑いながら学校まで踏みしめておる。近頃じゃこんな所にまでやってくる客人も多く、道をきいたりする。物見高い白人たちが日差しから目をかばいながら、物語の迷路に入りこもうと手助けを頼む。そんな声が聞こえてくるもんだ。物語はミーリが覚えていて、命を吹き込むもんじゃ。
……わしらの村は恥の村なんぞではない」



偉大なるシャーマンたるミーリが出発するときが来ると、踊り子たちはやっていたこと全てそっちのけにして、集まって見送った。彼らは何日も昼夜を共にし、旅路を行き、記憶を守っていたものだから、若い踊り子のなかには彼が去るのを見て泣く者もいた。立ち去る前に、シャーマンはジュールズとモナに髪につけたビーズを見せ、家に着いたら嫁さんに外してもらうだと説明した。ドゥムリングのビーズは、長い踊りの間、旅に出たシャーマン一人ひとりのお供をして、ステップを間違えたり、語りをどもつ

たりすることから守ってくれると信じられているのだ。

立ち去る前にシャーマンは客人に敬意を表して、最後に靈魂の詩を詠唱した。「私たちの踊りと、覚えておくことがなぜ大事なのかを分かってもらうためにな」と彼は私に言った。私たちは彼の前に座って、耳を傾けた。

この世の初め、ケユムだけがあった。無だ。闇でも光でもなく、またそれには色も形も動きもなかった。ケユムははるかな昔、私たちの感覚が届かないずっと向こうだ。それはいにしえのものごとがある場所で、そこからは何の返事も届かない。偉大なる静寂であるこの場所から、思考の最初のひらめきが輝き始めた、それは人間の魂のなかの光のようなものだ。それがチラチラと光る跡を残し、形ができ、伸びていって、道になったのだ。このおぼろげな一帯から、想像力の光である火花が生まれ出た。その火花が輝く小川、つまり人の意識となった。ここからこの世の全ての物語、生きとし生けるものが生まれたのだ。

「我らは目的もなしにここにいるのではない」とシャーマンは説いた。
「我らの目的は運命を全うすることだ。人の人生は行いによって値打ちが決まり、源が清ければ行いはよいものだ。無から我らは生を受けるようになった、星たちと全知全能のドンニー・ポロの神、太陽と月の下で。その光はあまねく等しく降り注ぎ、我ら一人ひとりを導く、見えざる力なのだ。命あるものはみな光と影だ、我らは生き、死にゆく。運命の道は信仰への探求だ」

そしてミーリはコムシングからの道を行った、満天の星の下を。

虫の心臓

冬が来るたび、一番高い尾根にある、周囲の村々から男たちが雪山へと旅に出、貴重な草の根を収穫する。それは命取りのトリカブトで、毒矢を作るために集められる。この毎年の旅がいつから恒例のものになったか、誰も覚えていない。しかしこの遠出にまつわる物語はたくさんあり、そのほとんどが旅に出た者自身が信じられないと言いつつ語ったものである。音のない荒野と幻覚の領域から生きて帰れたのは幸運だった、と彼らは言う。

ある年老いた旅人が、吟遊詩人でもあるのだが、自分が加わった奇妙で

大変だった旅のことを私たちに語ってくれた。自分はこの先生涯忘れないが、これから話すことを信じるかどうかは私たち次第だ、と彼は言った。

男たちは沈黙の儀式の最中に、厳しい表情をして素早く出発した。柵で囲った神聖な領域から姿を消すと、聖なる葉と先端にショウガをつけた矢で覆われた、防衛用のアーチ型の村の門を通り抜けて出て行った。選ばれた男たちが全ての感覚を研ぎ澄まして、竹に灯した明かりで幽霊のように白く輝く高い木々の密林を抜けて旅をしている間、誰も口をきかなかった。命に飢えた川や、肺から息を奪おうと待ち構えている山々がいることを彼らは知っていた。彼らの感覚を奪おうと、突き刺すような風が鳴り、彼らをあざ笑った。持ってきていた米の料理は固い粒に変わってしまっていた。

恐ろしい旅で、ついに彼らはともに凍った大地に立ち、一面荒涼とした風景のなかに点在するトリカブトの群生を見つめていた。彼らはディーミーターヤングの領土に入っており、それは寂しがりの靈魂で、湖の水を搔き回したり、侵入者を氷で包み込んで捕まえたりするものだった。

生き残れるかどうかは、いつもながら、勇気と素早い行動の問題だった。寒さで視界と感覚を失いながらも彼らは任務を果たし、旅の最も危険な部分に直面した。山々と空気に呼びかけながら、彼らは全ての方角に向いて、また来ることを約束しながらとま乞いをした。彼らを取り囲んでいるねたみ深い靈魂を説得して、安全に帰ることを許してもらわねばならなかつた。

「あなたたちの美しい国へまた旅に来ますから。今は無事に立ち去ることを許してください。私たちを恋しがったり、呼び戻したりしないでください。つぎはもっとたくさん贈り物を持って、またこの道を旅しますから」

決まり事を全て守り、男たちは荷物をまとめて出発した。一行の最後の男が後ろ向きになり、自分たちの足跡を拭い去っていたのは、靈魂が彼らの後をつけて人間の国に住み着くのを防ぐためだった。

実に素早く、振り返ることなく、彼らは旅をした。神々に情けがあるなら、彼らに害は及ばないはずだ。しかし今度は危険が待ち構えていた。悪い夢のように、塵が柔らかい球になって、地面すれすれに、彼らの後ろを

静かにぐるぐる回っていた。たえず形を変えつつ、雲は速く、大きくなつて、彼らを破滅させようと素早く近づく化け物の幻覚になった。奇妙な光が大地を覆った。風が泣き叫んだ。塵は体に刺さり、言葉にできない恐怖が心をよぎった。風を追い越せる者がいるだろうか。空気と戦い、ぐるり取り囲む山々に挑むものがいるだろうか。

ドクンドクンと胸を脈打たせながら、村の門を見上げて彼らは駆け出した。声を限りに叫びながら、必死で大きな石に這い上がり、石と石の隙間を飛び越えた。一人の男が辺りを見回した。恐れをしのぐ怒りが胸に沸き上がり、彼は弓を構えると、先祖を呼びながら、ぐるぐる回る暗闇に矢を放った。彼らは走り、転び、荷物を振り捨てて門までたどり着いた。不気味な静けさが立ち込めた。息を切らし、むせながら、彼らは互いに見合わせると、深く息をついた。下の方で、塵のような煙のやわらかな雲が巻き上がり、ゆっくり漂っていった。今度は、今度ばかりは、神々は彼らを救ってくれたのだ！大声で呼びかけ、彼らの前に石を投げながら、村の人々は片矢を探しに降りてきた。

それは、誰にも理解できない、異様な光景だった。矢軸は折れずにピンと立っていた。葉と踏みしだかれたシダの間で、一匹のカマキリが死んでおり、地面に留められていた。矢はその虫の心臓を貫通していたのだ。

これは、どういうことか？　これは何の靈魂だったのか？　何日もの間、旅に出ていた男たちは呆然とさまよう、青白い幽霊のような様子だった。そして、村人たちがシャーマンを呼び、危険が男たちにとりついで家までやってくるのを防ぐために、決まり通りの儀式を行った。

「靈魂を呼び出す方がまじじゃよ」とその老人は私たちに言い、物語を終えた。「ミーリには奴らに言ってもらわねばならん、人間の領域がねたみ深い怒りから逃れられるように」

旅する器の事例

この界隈の山々では、世界中のどことも同じように、歴史はすべてつながりの歴史である。突如誰かが遠くの氏族との親戚関係を訴える日が来るものだ。たとえば、私たちをこの村に連れてきてくれた、ラークトのように。

彼はここで生まれたわけではないし、肉親が誰もここに住んだことがないのだが、それでも彼はこの村と古来の絆があるのだと知っていた。そのつながりがどうやって作られたのか、あるいは彼の先祖のどの世代のどの部分だったのかといったことは彼自身覚えていなかった。「いつもそういうものだ」と彼は言い、ジュールズの好奇心を満たすことができずに少し悲しんでいるように見えた。「あんたなら、どういうことか分かるだろ」と彼は私につぶやいた。

ここに至って、コムシングの村長がラークトに助け船を出した。「つまり、こういうことじゃ」と彼は言った。「氏族を結びつける話はたくさんある。こんなつながりがどうしてできたのか忘れることがあるが、でも何もかも互いにつながりあっておるのじや。つながりができるのは、戦争の最中のこともある。女を通じてということもあるし、土地や、過去からもたらされた物を通じてということもある」

そして彼は、旅する器の物語を聞かせてくれた。

遠い昔のことだ。ミーグの氏族のローターング家が、ダーングキーという、それは素晴らしい器を持っていた。最強の合金でできていた、誇りと賞賛の一品だった。幅が広くて、浅いもので、表面には細かく入り組んだ印が剣を振り下ろしたように十文字に入っていたり、磨けば表面に人の顔がはっきりと映るのが見えた。どこからやってきたのか？ 誰もはっきりとは知らなかった。一家のうちで父から息子へと何世代も受け継がれたものだった。ある日のこと、一家の一番上の息子が器がいつもの場所に上下逆さまに置いてあるのに気づいた。彼は器をひっくり返すと、湿気でじっとりしていて、ところどころ表面にこけが生えているのを見つけて驚いた。ダーングキーは 穀物庫の片隅のいつもの場所に鍵を掛けてしまっていたのに、一晩でどうしてこんなことが起きたのか？

このときから、彼は毎朝穀物庫を調べ始め、器がいつもひっくり返されている、今度は湿った葉や枝が一杯に入っているのに気づいた。大変驚いたことに、ダーングキーのなかに見つかったのはその辺りに全く生えない竹の葉で、村の北方にある遠く離れた山々の、小さく、節の多い、成長の遅い種に属するのものだったのである。

迷信深かったので、彼は器を外に置くようになった。毎晩彼はそれをきれいに磨き、口が下になるように逆さにして放っておいた。毎朝器の口が上を向いていて、浅い器に枝やシダ、葉でいっぱいになっているのを見つけた。器の奇妙な行動について、噂が広まり出した。一家を訪ねて来て、その奇妙な現象について尋ねる人もたくさんいた。しかし、彼らがダーニングキーが保管されていた場所へ行くたび、行方不明になっているのだった。器が彼らをからかい、かくれんぼをしているかのようだった。そして、息子はダーニングキーはその氏族の人間にだけ姿を見せることに気づいた。

この頃のミーグ氏族は繁栄し、結婚相手に恵まれた息子や娘が多く、名を上げ、遠く離れた場所に住み着いた。そしてまたダーニングキーも、神々からの縁起のいい贈り物として大切にされるようになった。持ち主が持ち上げて、軽く叩くと、器は反響して鈴のような音を立てた。そして彼らはこの音と自分たちの幸運を結びつけるようになったのである。

百年から二百年ほど前の地震のすぐ後のことだった。ローターングの家の人がある朝目覚めると、かの有名な器が二つに割れていた。ダーニングキーの二つの破片はすっかり輝きを失い、鈍い、鉄灰色になってしまい、それぞれの破片はかつて無傷だったときの器よりも重かった。

一家は二つの破片をもっともきれいな泉の水に浸してこすり、灰やムクロジの実から出る泡で洗ったが、何を使ってもかつての輝きを取り戻すことはできなかった。人々が言うには、その直後にダーニングキーの二つの破片は姿を消し、ミーグ氏族の没落が始まった。彼らは息子に恵まれなくなった。ローターングの称号を持つ最後の息子は 98 才という長寿を全うした。彼には娘が六人いたが、男子の跡継ぎはいなかった。

そこでダーニングキーが消えた後、ミーグ氏族はとうに手遅れだと言いながらも、手の込んだ家族の儀式を執り行うことに決めた。彼らは一番高い木を切り倒し、森からアリの巣を取ってきた。木は強さの象徴であり、アリは多産と多くの息子の誕生を象徴した。有名なミーリが北方の山々から呼ばれたが、彼ははるか遠く、高い山の峰に近い村にいるという噂を彼らは聞きつけた。儀式を先延ばしにできないので、一家は西に二日行ったところにある村から別のシャーマンを呼んだ。彼は小柄でやや若く、初めは

ぱっとしなかったが、祈りの言葉を唱え始めると、声が優しくてはちみつのように甘いと女たちは言った。彼は村に三日間滞在し、この間ローターリング家に泊まって何くれとなく気遣いと敬意を受けた。このミーリが靈魂の世界と交信したとき、何らかの誤解や勝手な指示をしてしまったに違いない。というのも、去り際に盗んだ硬貨と重い宝石のネックレスが一杯入った袋を村に残して行ったからだ。

ミーグ氏族の母方のおじが追いかけたが、若いシャーマンは足が速く、復讐に燃えるおじが通った経路のどこにも彼の痕跡はなかった。

ある日、長い旅の帰路でおじは、幅が広く、流れの強い川のそばで激しく言い争う二人の女に出くわした。彼は立ち止まり、そうしなければならない理由を疑問にも思わなかったのは、二人とも知らない女だったからだった。しかし、捜索が失敗に終わって、村への帰りを急いでいるわけでもないので、木の後ろに身を隠して聞き耳をたてた。

「あの人にはビーズを分け合って言ったじゃない！」と若い方の女が叫んでいた。

「そうよ、だからあんたに 2 本あげたんだよ！」

「でもネックレスは 5 本あったわ！」

「私が 3 本もらったからね」

「よくもまあ！余りの 1 本も分けなきゃだめよ！」

「厚かましいわね。あんたには 2 本で十分よ。1 本でもツイてるのに」

「だって、ミーリが分けろって言ったのよ！」

「シッ！ そんなに大声で言うんじゃないよ。誰かにばれるかもしれないじゃないか！」

もはや、女たちが盗んだビーズ¹のことを言い合っているのだと、立ち聞きをしているおじの心に疑いはなかった。おじは剣を抜くと、隠れていた場所から飛び出して、一瞬のためらいもなく二人とも殺した。そして、岩の上で自分を見つめている老人を見つけた。「一部始終見られたからには、

¹ 使用したテキストではこの箇所は stone beads となっているが、訳者が著者に問い合わせたところ、stolen beads の誤植だったとのことである。

あいつも片付けた方がいい」と考えたおじはその老人に飛びかかると、切り倒してしまった。

さんさんと照りつける日差しをうけて、おじは剣から川に血が滴り落ちるまま、立っていた。大きな石に三人の体が横たわっていた。老人は後ろに飛び退いて、川に落ちてしまい、女たちはまるで足を滑らせて、硬い石で頭に深い傷を負ってしまったかのように、少し離れたところで身をよじったまま、動かなかつた。

「泥棒を捕まえに来たのに、これでわしが人殺しになっちました」とおじは思ったが、何も後悔はなかった。年を取ってはいたが、まだ丈夫で、その場から逃げるとき、ただ本能のままにやるべきことをやった森の生き物のような気がした。彼は先祖代々の村から姿を消した。それから何年も経ってから、ドゥヤーニングに属するシールム村に彼がたどり着いていたことをミーグ氏族は知った。そこがラークトの先祖の故郷だった。おじは土地の女と結婚し、息子を一人もうけた。

生まれた村におじを呼び戻すために使いが送られ、川のそばのあの場所から姿を消して14年後に、おじは帰ってきた。シールムの人々は彼を受け入れ、娘の一人を与え、義理の息子として敬っていたので、ミーグ氏族とシールムの全ての氏族が今や子孫のために親戚の絆で結ばれた。

「というのが、うちのシャーマンと吟遊詩人が記した歴史じゃ」とコムシングの年老いた村長は言った。「それに、人が病にかかったり、急に火事が出たり、または人殺しや命に関わることが起きたりして、いざというときには、覚えている限りつながっている親戚に呼び出しがかかり、同胞を助けに来るよう、氏族の人間に伝えられるのじゃ」

ジュールズとモナとの別れ

一晩中村人たちは歌を歌い、私たちに物語を聞かせてくれた。そして客人を見にどんどん人が押し寄せてくるにつれて、眠気はすっかり失せてしまった。ジュールズはいい調子で、ライス・ビールを際限なく楽しんでいた。

「これぞ生きることの楽しみだ」と瘦せて、年寄臭い村の長老たちがライス・ビールが並々と入った竹筒をかけた。ジュールズはうなずき、ラ

ークトは同感とばかりに含み笑いをした。「女がうまいアーポングを作る家はついている。アーポングが発明される前はだな、人生なんて退屈なものだったさ。男たちは暇だなあって思いながらぼーっと座ってたもんだ。話すことなんかないし、寄り合いがあるわけでもなし、物語も笑いもなかつたさ！」

「それで、誰がライス・ビールを発明したんだっけ？」隅に座っていた女が挑むようにつぶやいて、笑った。「こんな話があつてなあ……」とラークトは言いかけたが、思い直して、話す代わりにジョッキをチャップチャップいわせながらいつまでも飲んでいるので、皆は笑い、いっぺんにしゃべり始めた。

朝が来て、私は長屋の外でザーッと音を立てて雨が降っているのを聞いた。私は気が小さくて、帰りの旅路や長い橋、狭くて滑る道が恐かった。私たちが出発する準備が整うと、村の長老がピゴまでお供させてくれと言った。ジュールズもラークトも即座に賛成したが、私は橋を越えた後、一体皆が一台の車におさまるのだろうかと考えた。

しかし私たちはなんとか乗り込んだ。私は後部座席でモナと村の長老の間にはまり込んだが、外を見ると落ち着かなくなるので、好都合だった。赤色の粘土はかき回されて、滑りやすい泥沼になっていた。山肌をちょろちょろ伝っていたわずかな流れは、茶色い濁流に姿を変えていた。ここには何も生えておらず、ただギザギザの灰色のがれきがあるだけで、まるで山が崩壊して、散らばったかのようだった。

「川が増水していて、道はほとんど跡形もないよ。渡るのは無理だろうね。作業員も出ていったし、ブルドーザーも残っていないんだから！」私たちが出会った旅人たちは声を張り上げて言ったが、風にかき消されてしまった。私はこの恐ろしい岩と砂利の広場は歩いて渡った方が安全だと考えて、車から飛び降りようとした。

「乗りなさい！」運転手と長老が私に向かって叫んだ。「中にいなさい、何とか進めるから」と。

そして、泥と石のなかをタイヤが激しく回転し、軋みながら、私たちは進んだ。異様な、沈んだ地形から這い出すと、私たちは声を落として囁く

ように話した。モナは落ち着いているように見えたし、ジュールズも平穏だった。私は元気が出るのを感じた。ひと山越えたのだ。

次の水場で立ち止まって、昼食を食べた。葉にくるまれた包みを開くと、山の米しかなかった。「なんだい、米しかくれなかつたのか?」とラークトは言った。誰もが降参し、心が折れるような天気だった。雨は土砂降り、空は雷と稲光で騒がしいなか、私たちは急いで村を出たのだった。誰も考える時間などなかった。「なんと、米だけとは!」村の長老は即座にポケットから魚の干物の包みを取り出した。「さあ」と私に言った。「友だちに食べてみてもらってくれ」と言って、塩と乾燥唐辛子の包みも取り出した。私たちは自分の包みを大木の陰にある、石のある場所へ持って行った。そのそばの小川で女の子が二人、山積みになった空き瓶を洗っていたのだが、荷物を置いて逃げ出し、少し離れたところから面白がって私たちを見ていた。村の長老も少し離れて道端に立って、まるで見張っているかのようだった。しかし彼がそんなことをしたのは、皆に行き渡るほど十分な食べものがなくなると思ったからではないか、と私は疑った。ジュールズが身振りをし、ラークトがご一緒にと誘ったとき、「今は食べる気がしないだけじゃ」と彼は丁寧に断った。雨のなかを立ったまま、巨大な山々に見られながら、私たちは食べた。

「コホン」村の長老は咳払いをすると、今度は乾燥させたツリー・ラットを私たちの目の前に置いた。それはたいそうな贈り物だった。ジュールズは長老に向かって微笑み、うなずきながら、それをつまみ上げると、何度もひっくりかえしてみた。ツリー・ラットとは実際にはキタリスのことでの、そのつがいは私たちの山の方では、伝統的な婚約の贈り物となっている。そういうわけで、キタリスが簡単に捕まり、その深いオレンジ色の毛皮がもっとも光沢を増す冬の数ヶ月の間に、結婚式はたいてい行われる。長老がツリー・ラットを車のボンネットにポンと置いた瞬間に、道や岩に對して私が抱いていた暗い気持ちや恐怖がいくらか消えていくのを感じた。それはまるで、分かち合っていることを身振りで伝えながら、大地が私に語りかけてくるかのようだった。「これはおまえの土地だ。何が起きても、恐れることなどない」

私たちが食べ終わると、村の長老は塩と唐辛子粉を回収しにきた。「これはわしがもらっておく、もったいないからな」そう言うと、注意深く葉を丸めて小さな入れものを作った。ジュールズは最後のたばこを分かち合おうと、7 本ずつラークトとその長老に配ると、二人はそれを受け取って緑色の織物のジャケットの内ポケットにしまい込んだ。

ピゴの町の境界まで来ると、村の長老は形式ばったことはなしで、右側に集まっているブリキと木でできた店に声をかけることもなく、車を降りて歩き去った。口数が少ないので、人里離れた村のこの手の男たちというのは。しかし私は彼が雨のなかへ堂々と大股で歩いて行き、フィルターの付いた白い棒をふかしているのを見て、私は内心昂ぶった。



モナとジュールズが出発する日はすぐに来た。私たちはさよならを言いに、ゴルドムからドゥヤーングへ行った。今度は客人に伝統的な送別会を開こうと、かごに入った食べ物と肉を持って、皆再び集まっていた。ジュールズは織物の半ジャケットを着て、ノートや写真をいっぱい詰め込んだバッグを持っていた。モナはホクソの母からの贈り物である、明るい色のショールにくるまっていた。そして彼らは、笑って村中の人と写真を撮りながら、そこに立っていた。

いよいよ客人が去るというとき、女性の一団が勇気をふりしぶって、聞こえよがしに内輪で大声で囁いた。

「ねえ、ちょっと。あの二人はどこで出会ったの？ ブリーティーシュの白人なの？」

私は、海と大陸の半分によって隔てられた国にあの二人が生まれ、どんな風に空港で一緒になったのか、できるだけうまく説明しようとした。

「あの人たちの結婚ってどうなってるの？ どんなふうに結婚のお祝いをするの？」

「そんなこと聞いて何するつもりだ？」とラークトは女たちに怒鳴った。
「それを書き留めておくつもりなのか？ どこだって一緒だ。わしらと同

じで、二人でベッドを揺らすんだよ！」

女たちが笑った。ラークトが笑った。私たち皆そこに立って、頷いたり、笑ったり、楽しんでいた。するとジュールズがモナの手を引き、二人は明るく手を振った。まるで、その日村に降り注いでいた明るい日の光のなかで、何か新しい喜びを彼らは吸収したようだった。

「旅をするお前さんたちが、途中でバテませんように」とホクソとロシ一は大声で言った。

「ハイ、ハイ！」と比類なきジュールズが同調して言った。

そして私は、二人にも、村にも、村のすべての男女にも、年寄りにも、若い狼の群れみたいに大声を出して車の後を追いかけまわしている湊を垂らした子どもたちにも、よかったねと言いたい気持ちだった。

使用テキスト

Dai, Mamang 2006. *The Legends of Pensam*. New Delhi: Penguin Books.

先に『印度民俗研究 18 号、19 号』で発表していた、ママーニング・ダイ著の短編集『ペンサムの伝説』の翻訳をこのたび再開することができた。今回訳出したのは、「吟遊詩人の歌」と題されたパートである。冒頭で触れられている 1912 年のアボール討伐は、アルナーチャル・プラデーシュ州の歴史における大きな転換点であり、ダイ氏の小説『ブラック・ヒル』(2017)、『土地を逃れて』(2021)にも描かれている。

アーディ族の人びとは、物語はそれ自体も魅力的だが、モナやジュールズといった外国人や通訳でもある「私」に見せる顔、態度にも彼らの考え方や価値観が垣間見えることが興味深いといえるだろう。

最後に、今回も快く翻訳の許可を下さり、また訳者の質問に丁寧に答えて下さったママーニング・ダイ氏に心から感謝申し上げます。